



下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話 : 「見立て」によるニュース・レトリック論

著者	北村 日出夫
雑誌名	評論・社会科学
号	50
ページ	129-142
発行年	1994-09-20
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002095

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

—「見立て」によるニュース・レトリック論—

北村 日出夫

【見立て】(名)

- ①～⑤ (略)
- ⑥ 似た、別のもので、そのものをたとえること。別のものになぞらえること。とりなすこと。
- ⑦ 俳諧で、あるものを他のものになぞらえる作りかた。また、比喩仕立ての句。
- ⑧ 歌舞伎で、類似の他のものを連想させて表現すること。様式美を形成する主要な要素の一つ。
- ⑨ (略)

—小学館『日本国語大辞典』

本稿は、『今昔物語』の一つの説話を題材に、物語とニュースを並行的に論じることを目的としている。そのために、既存の「物

語論」を参照しながら、具体的な一つの説話を新聞記事に「見立て」で、そこで浮かび上がる事柄について論じる一つの「試論」である。

なお、ここでいう「ニュース」は、新聞記事であってもテレビ・ニュースであってもいい。出来事を「認識し・伝える営為」を、ここでは「ニュース」と呼ぶ。以下で、再々この「ニュース」という用語を使用するが、いずれもこの意味である。

一 『今昔物語集』 卷第二十九 本朝付遷行 第八

『新潮日本古典集成——今昔物語集・本朝世俗部』(校注者：阪倉篤義・本田義憲・川端善明)^①によるこの話は次のようである。

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

今は昔、下野守藤原為元と云ふ人有りけり。家は三条より南、西洞院よりは西になむ住みける。十二月の晦比に、其の家が強盜入りけり。隣の人驚き合ひ唝りければ、墓々しく物も否取り得て、盗人、「籠められぬ」と思えければ、其の家より吉き女房の御しけるを、質に取り抱きて出でにけり。三条より西様に逃げて行きけるを、この質をば馬に打乗せて、大宮の辻に出でたるに、「人追ひ来たり」と思えければ、此の女房の御衣を引き剣ぎて、盗人は棄てて逃げにけり。

女房、習ひ給はぬ心地に、裸にて怖し怖しと思ひける程に、大宮河に落ち入りけり。水も凍して風冷きこと限り無し。水より這い上がりて、人の家に立ち寄りて門を叩きけれども、恐じて耳に聞き入るる人も無し。然れば女房に遂に死にければ、狗に食はれにけり。朝見れば、糸長き髪と赤き頭と紅の衿と、切々にして凍の中に有りける。

その後宜旨下りて、「若し此の盗人捕へたらむ者には、止事無き賞を給ふべし」とて、唝り合ひたること限無し。此のことは荒三位と云ひて、藤原□と云ふ人ぞ負ひける。其れは、「其の荒三位の、彼の狗に食はれたる姫君を假借しけるに、聞かざりければ」とぞ、世に人云ひ唝りける。

而るを、檢非違使左衛門尉平時道、承はりて尋ね求むる間、大和国に下るに、山城国に杵杜と云ふ所の辺に、男指会ひたり。其の男、檢非違使を見て突居たる気色の性しかりけれ

ば、其れを搦めて奈良坂に將て行きて、「已は犯したる事有るめれ」と云ひて、只問ひければ、男、「更に犯し仕らず」と諍ひけるを、責めて問ひければ、「去々年の十二月の晦比にぞ、人に偏はれて、三条と西洞院どに有りし殿原に罷入りて、物をば否取らで、止むこと無かりし女房を質に取り奉りて、大宮の辻に棄てて罷逃げにし。其の後承はりしかば、死にて狗に食はれ給ひにけり」と云ふを聞きて、時道喜びて其の男を將て上りて、其の由を申し上げたりしかば、「時道大夫尉に當つべし」と世に云ひ唝りしかども、其の賞も無くて止みにき。何なることか有りけん、「必ず賞有るべし」と仰せ下されたりしかども、遂に時道冠を得て、左衛門大夫とてなむ有りし。世の人皆誇り申ししことなめり。

此れを思ふに、女なりとも尚寝所などは拈めて有るべきなり。徒らに臥したりしかば、此く質にも取られたるなりとぞ人云ひけるとなむ、語り云へたるとや。

この説話を、池上洵一の現代語訳を借りて《新聞記事ふう》に編集したものを末尾に示す。

二 物語化の手法とニュースの手法

小林美和は『保元物語』について、「人間と人間の関係、そこに生じる葛藤・軋轢が語るべき歴史を生み出すのだ」ということをこれほど明瞭に語った物語は、他に例を見ない。物語が歴史であ

り、歴史が物語でありえた中世の語り物(軍記物語)の最大公約数がここには示されているように思われる。歴史は一回的なものであり、繰り返し反復するものなどは歴史の名に値しないことをこの物語は証明しているかのよう「みえる」と述べている。たしかに、それが事実か(伝承かは別として、物語に内在する歴史性は、典型的に、軍記物語にあるとはいえず、言語によって何らかの出来事を表現しようとするのは、語り手(または書き手)が選んだレトリックによって出来事を言説化するとともに、その出来事に内在するコンテキストの中で、一回的なものとして語る(書く)普遍的な物語行為である。伝承としての《今昔物語集》に、そして、あえていえば、新聞記事・テレビのニュース等にも、この普遍的な物語行為が存在する。

荒木博之は、「もの↓ものがたり」「こと↓ことわざ」の対比から、《ものがたり》は原理的・法則的なこと、すなわち、世の原理・法則についての説話であるが、一回的な出来事を語る形式をとるといえる。

この考えを逆にたどると、物語は、一回的・一時的な出来事|| 特殊の出来事を原理・法則的な判断のもとに言説化したものである。そして、具体的出来事に原理・法則的断定を行なう物語言説は隠喩的表現を伴い、絞切り型の評価が加えられることが多い。このように、出来事を物語のレトリックとコンテキストで言説化することが物語としての一般的な手法である。

池上洵一は、《今昔物語集》論で「現実起こった出来事につ

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

いてコメントを加えた情報という次元から抜け出して、話としての主題をすだいに明確にし、その主題を伝達するのに効果的であるように、内容や構成を整えてゆく」と述べ、また「ある出来事が説話になるということは、話し手の側に主題が確立し、その線にそって語り口が整えられ安定してくることではないだろうか」と記したうえで、「しかし、(中略)伝承の過程で主題が変わり、話の意味に変化が生じる場合も少なくない」とも述べている。これらの過程を通常の「物語化」の手法として整理すれば、

- (A) 現実起こった《出来事》
 - (B) コメントを加えた情報
 - (C) 話としての主題設定
 - (D) そのような主題を伝達するのに効果的であるような《内容》や《構成》を整えていく
- と図式化でき、この過程に物語のレトリックが組み込まれてくる。

これを類似的に出来事の「ニュース」の手法に移行してみると、

- (a) 現実起こった《出来事》
- (b) 取材による情報の追加
- (c) 記者の予見による「粹」の設定
- (d) 起承転結ふうの記事構成

となる。「(a)現実起こった《出来事》」がニュース的出来事とし

下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話

て認識されると、必然的に「(b)取材による情報の追加」が試みられる。起こったことをそのまま認知することはできても、それを他に伝えようとする営為は、自らの認識の範囲の拡大と補填を必然化する。このことで出来事は認識者(伝達者)に引き寄せられ、出来事が言説化されるためのレトリックが芽生える。そして、そのレトリックが完成に向かう過程で「(c)記者の予見による「枠」の設定」が行なわれる。ここでいう「記者」はいま述べた認識者(伝達者)である。言説化するためにはレトリックとともに出来事をコンテキストの中に置かなければならない。このコンテキストは、出来事が物語になるといふ限りにおいて出来事に内在しているものであるが、それは物語たらしめる認識者(伝達者)が引き出すものであるという意味で認識者(伝達者)の予見による「枠」となる。また、この「枠」がなければ、認識者(伝達者)は出来事を「物語」として他者に伝えることができない。出来事が、物語としてレトリックを獲得しコンテキストに設定されて具体的言説として物語になることが、「ニュース」の最終段階としての「(d)起承転結ふうの記事構成」ということになる。

三 三つの基本レトリック

出来事を〈認識し・伝える営為〉としてのニュースのレトリックの考察では、G・ジュネットが指摘する「物語」に含まれる三つの異なる概念(領域)——物語言説・物語内容・語り⁽⁸⁾——を念頭に置きつつ、「物語内容」にからめて「物語言説」と「語り」

に関して、次の三点を指摘することができる。

- (a) 内容構成のための言説
- (b) 「見どころ」の設定(捻出)
- (c) 娯楽化への要請

(a) 内容構成のための言説

あらゆる言説の構造化には「起承転結」レトリックが一般的であるが、それを別にすれば、ここでの典型的なレトリックの一つは「絞切り型」「常套句」の多用である。ニュースにこの種の表現法が多用される理由として、少なくとも、次の三つが考えられる。

- ① 用語の選択に苦勞しなくてよい(表現のための省エネルギー)
 - 1) 読む(聞く)側のエネルギーの省略化(感動・認知の当たり前の日常化)
- ② 用語上の批判をそらせる(今まで、多くの人が使ってきたという安心感)
- ③ 日常的な物語行為において、もっとも重要視されるのは、語る側では①、受け取る側では②である。鳥井守幸は「重大な事件が進行しているのに、材料はさっぱり入ってこない。ことの重要さはわかっていても、客観的事実として並べる要素にこと欠く。締切の時間は迫る。そんなときだ。絞切り型の慣用句が、まるで悪魔のささやきのように新聞記者のペン先を誘導してくるのであ

(9)と書いている。絞切り型的慣用句は、社会的な事件報告によく多出し、鳥井は前掲書でこの分野の用例を数多く上げているが、それ以外にも、たとえば、選挙報道で「まんべんなく支持を集め」「組織のゆるみを警戒し、懸命に引き締めている」「〇〇票をほぼ固め」「追い上げていく」「独自の戦い」……等々の、特有の絞切り型表現がいつもみられる。さらに、テレビのスポーツ中継では、より一層、言い古され、手垢のいっぱいついた絞切り型表現が繰り返しひつこく登場する。

このような省エネルギーとしての絞切り型表現は、昔話をはじめ、物語行為一般に共通して現れる。もし、全体が精緻・鮮烈・斬新で、かつ、文学性を強く備えた表現であれば、その物語の享受過程全般にわたって受け手が隅々まで神経を働かし、場合によっては神経をすり減らし、極度に疲労させられる。したがって、ありきたりの表現、絞切り型の表現を多用することが、受け取る側のエネルギーの省略化につながり、楽で日常的な享受を可能にしてくれる。テレビのスポーツ中継での絞切り型表現の多用は、視聴者の省エネルギーに役立っている。それは、アナウンズや解説という聴覚面だけでなく、視覚面(映像)の「絞切り型表現」——カメラワークや映像の切り取り方等においても——も、視聴者との慣用的約束事となつて、日常性の中の気楽な視聴を助けているといえる。

こうした省エネ表現としての絞切り型は、やたら「感動」を覚えることを避け、物事の認知に一々気を遣うことから逃れるため

に、日常的な物語行為の言説化の中で培われてきたレトリックであろう。

《今昔物語》の「今は昔」ではじまり、「……となむ、語り伝へたるとや」で終わる語りの繰り返しパターンは、まさに典型的な「絞切り型」そのものである。

また、絞切り型は、多用されることで絞切り型になったのだから、表現の責任が拡散して、言説化に気楽さと安心感をもたらす。③はこのような意味である。

(b) 「見どころ」の設定(捻出)

自ら取り上げた出来事が重要であり、このニュースこそ重大であるという《自己正当証明》を伴わない「語り」、あるいは、「ニュース」はない。

ニュースにおいても、また、通常の物語においても、すべてのことを取り上げるのは不可能である。正確な意味で、「すべてのこと」は存在しないし、存在を確認しえない。取り上げられた出来事のみが存在するのである。そして、取り上げた出来事を《存在させる意義》は、語り手しか証明できない。したがって、語り手は、取り上げた出来事がいかに重要であるか、どこにその重要性が存在しているか、何が重要であるか、なぜ重要なのか、などを示さなければならない。それとともに、この出来事の「見方」を受け手に提示することで、自ら設定した重要性の証明を行なう。

下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話

これが「見どころ」の設定であり、「見どころ」の検出である。この物語のどこに着目すべきかを明示するためのレトリックと同じ方法が、ニュースにおいても用いられる。ここでも、テレビのスポーツ中継がその典型例となる。

「主催」「独占中継」「生中継」ということがどれだけテレビ局を拘束しているか。「いま何故これを取り上げるか」ではなく「取り上げているものが如何に重要か」をテレビ局（新聞社等）は説明しなければならぬ。そのために、出来事の本質ではなくて、出来事の「見どころ」を設定し、場合によってはそれを捏造する必要がある。ニュースが、この本質に迫るより、取り上げる意義を強調するのはこの故である。ニュースや物語のレトリックは、こうしたことをスムーズに行なうことを可能にする工夫の上に築かれている。

また、「見どころ」を設定する言説には、絞切り型が多用される。たとえば、昨今、あらゆる出来事・イベントに「目が離せない」というフレーズが乱用されている。目が離せない（注目する価値がある）からこそニュースとして伝えていと思うのだが、伝え手自身が自らを諭すように「目が離せません」というのは、自身の中の堂々めぐりの論理でしかない。「見どころ」の設定は、絞切り型のレトリックとも密接に結びつく。

(c) 娯楽化への要請

物語は、歴史・生き方・教訓等を語りつつ、聞く者にある種の

心地よさを与える。語るという行為の中に、すでに愉しさが含まれている。今日ふうの表現をすれば、語りは娯楽行動である。そして、ニュースも同様である。現代では、「面白くてためになる」ということが新聞作りのキャッチ・フレーズになる。メディア史の中で、識学教育（学習）や権力的メディア独占のために、活字メディアは娯楽化を拒否する性格を持たされてきた。テレビが活字離れを促進したのは、テレビ・メディアの近づき易さ（accessibility）が、活字メディアに託されたこの性格の逆現象として、簡単に活字が忌避されたからである。しかし、現代では、メディアの融合化・同質化の中で、活字メディア自身がテレビ的に変容し、娯楽化を志向するようになった。「親しみやすい」「わかりやすい」といったことが、いまや、すべてのメディアのニュースの基本姿勢である。

テレビは、そのメディア特性から本質的に娯楽メディアであって、テレビ番組すべてが原初的に娯楽性を帯びている。ただ、テレビの新奇性（novelty）の時代には、テレビ・ニュースから娯楽性が隠蔽されていたが、テレビ時代（およそ一九七〇年代初頭）になると、テレビ・ニュースにおいてもようやく自覚的に娯楽性（娯楽としてのレトリック）を打ち出すことになる。その嚆矢が、一九七四年四月にスタートしたNHK「ニュースセンター9時」の磯村尚徳のレトリックであり、そのレトリックを一段と確立したのがテレビ朝日「ニュースステーション」（一九八五年一〇月スタート）の久米宏である。

かくて、テレビをはじめ、すべてのメディアのニュースが、ますます物語そのものに近づいていくことになる。

四 構成上の補完

『今昔物語集』巻第二十九 本朝 第八」にもどる。
池上洵一は前掲書の中で次のように述べている。⁽¹¹⁾

この異常な殺人事件はたしかに時の話題をさらったであろうし、この話でも彼女の死は、本当に目撃者はいなかったはずなのに、大宮河への転落、開けてくれない門、凍死と、まるで見たように語られていて、読者であるわれわれの胸にもその惨劇が強く焼きつけられる。

ここで注目したいのは、池上とは違った観点からであるが「本当に目撃者はいなかったはずなのに」という指摘である。物語構成上の補完部分であるが、これがなければ、この物語を効果的に語るができない。誰も見ていないはずなのに、この事件の核心部分の一つが生々しく描写されている。

こうした構成上の補完は、物語の効果という点からは勿論のこと、言説そのものに伴う普遍的な言語作用である。その一つは、かつて述べたことがある「接続詞」による補完である。Aという文とBという文を継続して併置（繋置）するとき、通常、われわれは、順・逆順等の接続詞を間にはさむという言語行為をする。ある言説には意味付与とコンテキスト設定を伴うが、この両者の要請（言語認識過程から生じる文章構成心理等の必然的結果）か

下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話

ら、二文繋置の場合、「接続詞」によって二文の補完をさせる形をとる。

もう一つは、出来事を捉えるとき（言語認識しようとするとき）、前述したように、出来事のある「枠」の中で把握しようとするにかかわる。出来事の言語認識とは、自らにとって意味あるものと捉え、自らのコンテキストの中に置くことである。たとえば、インクプロット⁽¹²⁾でできるあいまい図形によるロールシャッハ・テストや、あいまいな絵から物語を作らせる TAT⁽¹³⁾などは、人間のこのような言語による認識特性を利用した「性格テスト」の一方法である。

なお、TAT Thematic Apperception Test（主題統覚検査）に関して、『新版・心理学事典』（平凡社・一九八一年）は次のように記述している。

ハーバード大学のマレー Murray, H. A. とモーガン Morgan, C. D. によって一九三五年に正常なパーソナリティを研究するための道具として開発された投影法である。マレーは人間の一生を出来事（エピソード）の連続体としてとらえ、人格の研究をするときその人の重要な人生上の出来事を集め、その出来事の構造上を心理力動的方法で分析することで人格の構造をとらえようとした。その出来事収集の過程で、過去の出来事を想起させる一つの手段として過去の重要場面を描いた図版を見せることで空想物語を作らせることを行ない、その空想物語を手がかりに過去の

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

出来事を想起させようとした。しかし、その後、図版に刺激されて作られた空想物語（T A T 物語）そのものにその人自身のパーソナリティの構造が表れることに気づき T A T 検査法の誕生となる。（中略）

……現象学的にとらえれば、T A T 物語は一つの創造過程であり、それには自発的な体験過程を基礎に図版場面との関係の中で状況の自由な設定と状況の中の自由な選択を含む過程である。とはいうもののまったく自由に動けるのではなく、その状況においてある一定の構造をもってしか動けないところにその人の人格構造が浮彫りにされるのである。（後略）

物語をまとまったものとして構成する場合、間を埋めて話に筋を通す場合（Ⅱ内挿法）と、話の先を推量的に繋げていって結末を与える場合（Ⅱ外挿法）とがある。

ここで取り上げている説話では、第二段落の終わり「此の女房の御衣を引き剥ぎて、盗人は棄てて逃げにけり」までは、同時に認知できていなくても、後の事柄との関連で確認することができる。しかし、第二段落の終わり近く「狗に食はれにけり」までは内挿法によって話を構成している。この内挿法的構成を含まなければ、この説話の効果は減じられるし、また、物語る側も聞く側も、物語行為にかかわれば、この部分が必要とする。

「見てきたような嘘を言い」という俚諺があるが、話を面白く、効果的にする物語の通常的手法を言い表したものと理解でき

る。

ニュースの構成においても、これと同様の手法（内挿法的・外挿法的レトリック）が、言語認識活動である以上、とられていることは間違いない。効果的言説を目指せば目指すほどのことが行なわれる可能性が高い。

五 実名と匿名

三度、池上洵一を参照する。

……『今昔』撰者は登場人物の名をできるだけ明記しようとする性向をもっている。氏名の一部や通称がわかっている場合にはとくにそうである。しかし明記したいと思う人の氏や名がそう簡単にわかるとはかぎらない。そんな時、撰者は後日の明記を期してか、その部分を空白として残しておくのである。⁽¹⁴⁾

ここに取り上げている説話の中で、「藤原□□と云ふ人ぞ負ひける」がこれに当たる。池上説に従えば、『今昔物語集』の語り手⁽¹⁵⁾撰者は、物語の登場人物に関して原則的に実名で語ろうとした。軍記物語等の歴史物語や、公家等の日記などではこの原則は当然だが、伝承説話である『今昔物語集』の本朝世俗部で実名主義をとっていることに注目したい。何ゆえに『今昔物語集』の撰者が原則として実名主義を貫こうとしたのか。古代から中世への歴史上類い稀な時期に、変革の担い手として時代の表面に登場してきた武士をはじめ、この時代を生きたさまざまな人達の姿をい

きいきと伝えようとした《今昔物語集》撰者の意図が、こうした実名主義に現れているのかも知れない。

時代を切り取り、いきいきと伝えようとする意図は、今日のジャーナリズムも同様であろう。《今昔物語集》の実名主義が、現代のニュースのそれにとろ絡むか、「時代の記録」という意味で考察に値するだろう。

一方、この説話の不幸な女主人公については、《今昔物語集》の撰者は、一転、匿名主義をとっている。この女性については

「吉き女房の御しけるを」

「女房、習ひ給はぬ心地に」

「女房□□て遂に死にければ」

「姫君を假借しけるに」

「止むこと無かりし女房を質に取り奉りて」

と書き表している。

池上は「まずこの話では被害者の女性の素姓がいっさい説明されていないことに注目しなければならない」と指摘し、さらに「吉き女房」「姫君」と敬語を用いたことに着目している。池上によれば、敬語を用いることは《今昔物語集》ではきわめて異例なことであって、とくに「地の文において女房階級の人に対して敬語を用いた例は他にない」という。したがって、撰者は「この被害者がふつうの女房ではなく、きわめて高貴の血をひく女性であることを知っていた。それどころか花山院の女王とまでちゃんと知っていて、あえて名を伏せた」と想像できる。他の登場人物は

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

(中略)、肩書きまでつけて正確に語っているのに、殺された本人のことだけ知らなかったとは考えにくい⁽¹⁶⁾という。

事実、正二位右大臣・藤原実資の日記『小右記』の一〇二四年(万寿元年)二月八日条に、同月六日深夜の出来事として、この被害女性は、華山院の女王(「皇女」)で、太皇太后宮(「藤原道長の娘上東門院彰子」)のもとに女房として出任していた女性であると記述されているくらいだから、当時としては評判にもなり、よく知られた事件であったから、(池上のように)後にこの説話を取り上げた撰者がこの女性の名前を知っていたとみるのが普通だろう⁽¹⁸⁾。

ただ、《今昔物語集》の撰者は、わざと名前を伏せたのではなく、もともと、この撰者は(他の説話においても)「女性の名前を明記しようとはしていない⁽¹⁹⁾」と、池上は指摘している。

現代のジャーナリズムにおける「匿名」の理由としては、少なくとも次の二つが考えられる。

⑧ 人権の尊重と保護

⑨ ジャーナリズム内部の約束事

⑩ は積極的匿名姿勢として、その態度を貫くのを「匿名主義」と名付けることができる。⑪ は、ジャーナリズム内部の閉鎖集団に発生する《隠語》ふうの匿名であって、政治記事での談話記事などで多用される消極的な匿名である。「政府首脳」「〇〇省高官」といった表現は、日常的に散見される。これは、あえて職名・氏名を匿名とするが、前者は大臣・長官、後者は事務次官を指

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

すことが仲間内では了解されている。ストリートに名指さない約束事が取材する側・される側で成立している場合にこのようになる。また、事前に「オフレコ」と約束された場合は、取材源をまったく記載しないのが日本のジャーナリズムの常識となつていゝ。(アメリカの記者の取材常識では「オフレコ」といわれたら「それでは取材しない」とその取材そのものを拒否する場合が多いようだが)。

このような消極的匿名は、よく指摘されるように、日本のジャーナリズムの特徴である「記者クラブ」制度とそれに付随する「番記者」の存在から発生する。取材対象に日常的に接触しており、取材対象の感情を害し(ご機嫌を損ね)たら取材がスムーズにできなくなるため、名指しの批判記事が書けないばかりか、約束事を設定して取材対象を保護する結果、このような消極的匿名が行なわれ、約束事が成立しえない無防備な一般人に対しては、むしろ人権を無視した実名報道が、逆に、行なわれる。

さて、《今昔物語集》の撰者の女性に関する匿名主義はどのような意味をもっているのだろうか。勿論、上記の①、②いずれでもないが、どちらかといえば、撰者自身、女性の登場人物について名を伏すことを自らの約束事としていたのではなからうか。この時代の説話の語り手に「人権意識」があったと仮定することは極めて困難で、むしろ、女性を匿名にするという撰者の自覚的な信念がこころざせたのではないか。この説話では、当該女性は事件の被害者として重要な登場人物である。たいした人物でないから

名前など問題にしないでいいというのではけつしてない。話の中心を平時道に置いたとしても、最後の「教訓」ではこの女性の用心を論じているくらいだから、やはり、この説話の重要人物と撰者は認識している。それをも、他の説話の女性同様に匿名にしたのは、撰者の自覚的な信念のせいだろう。

現代のジャーナリズムが実名・匿名の区別を、いかなる自覚のもとに行なうか。信念をどう確立させるか。問われ続けている問題点である。

六 「世間」と「教訓」

取り上げている説話の中で、「世」という用語が三度現れる(傍点北村)。

① 此のことは荒三位と云ひて、藤原□と云ふ人ぞ負ひける。それは、「其の荒三位の、彼の狗に食はれたる姫君を仮借しけるに、聞かざりければ」とぞ、世に人云ひ嗚りける。

② 「時道大夫尉に当つべし」と世に云ひ嗚りしかども、

③ 遂に時道冠を得て、左衛門大夫とてなむ有りし。世の人皆誇り申ししことなめり。

ここでいう「世」は、現代語では「世間」(あるいは「世の中」と同義である。それぞれ現代語ふうに表記し直す)、

① 藤原の其に嫌疑をかけられたのは、例の犬に食われた姫君に想いをかけたのに、叶わなかった(振られた)か

らだ——と世間の評判であった。

② 「時道が大夫尉に叙せられるだろう」と世間で大評判であったけれど、

③ 結局は、時道は五位に叙せられ、左衛門大夫となつた。世間の人が皆(お上を)非難したからだろう。

と、傍点部分のように、いずれも「世」は「世間」と解せられる。

①は、「世間」の《證》を紹介して、物語内容の補強をするレトリックとして「世間」が利用されている。取材源が確定できなかったり、根拠があいまいな場合でも、この《部分》が必要と思われるるとき、「世間」の尊などを引き合に出して、「このようだ」とする物語構成方法はごく一般的なレトリックで、現代のニュースにおいても時々用いられることがある。

「時道が賞を受けるに違いない」という「世間」の評判を紹介し、ところが、なかなか褒賞が行なわれなかった、と伏線をはりながら、③へのつなぎの役割をしている部分が②で、その「世間」の《圧力》《非難》によって、結局は、恩賞が行なわれたのだと④の展開と結末提示がある。ここでは、「世間」に極めて重要な働きをさせている。今日ふうにいえば「世論の圧力」ということになろうか。権力への監視機能としての「世論の力」を《今昔物語集》では「世」＝「世間」として物語の中に組み込んでいる。子供の会話からニュースに至る「皆が知っている」「世間では〜だ」という庶民レベルのレトリックが平安末期から鎌倉初期

の頃にも現れていることは興味深い。

最後に、《今昔物語集》の常套手段として各説話の終わりに、いちいち「教訓」を提示していることに触れておこう。

《今昔物語集》のこの方法は、冒頭の「今は昔」とセットになつた物語の《終わり方》のレトリックである。ここで取り上げた説話は、悲惨な死に方をした女性を主題に、「女であっても寝るところは、硬く用心しているべきだ」と論じている。今日だったら「女だから」「女なら」というところを、妻問婚を前提に「女であっても」といっているのか知らないが、事件の経過や結末だけを物語るのではなく、「こんなことにならないように」という教訓で物語を結んでいるのは、《今昔物語集》の撰者の、お節介ささと、世間に向けた物語の先駆性が伺える。

現代のニュースにおいて、「なぜ事件・事故報道をするのか」「なぜ悲惨な映像・写真を流すのか」といった批判に対して、伝え手から、「こんなことがあってはならない」という教訓として、云々」と、それを正当化する理由をよくきく。マス・メディアの論理として、「客観性」を重視しているといいたが、啓蒙主義的レトリックを用意している。犯罪報道における「実名報道」擁護派は、実名で報道することが犯罪の予防につながるし、実名が出ることで社会的制裁が加えられたと裁判所が判断するから、結果的に減刑につながる、といった理由を挙げているが、ある意味で、この論理は、ニュースの伝え手側の啓蒙主義的優越的指導論理である。

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話

今は昔、下野守藤原為元という人がいた。家は三条西洞院にあった。ある年の十一月の末、その家に強盗が入った。隣家の人が気づいて騒ぎだったので、盗人はるくは物も取らず、包囲されたと思つたので、その家にはいた「吉キ女房」を人質にし馬に乘せて三条大路を西へ走つたが、大官大路との辻に出たところで追手が迫つたと思ひ、人質の着物に刺き取り裸にして放りだして逃げ去つた。

たいたければ、深夜の訪問者に門を開けてくれる人はいない。彼女を待つていたのは煉死と、その死体に群がる野犬たちだつた。翌朝人々が見たのは水の中に散らばつてゐる長い長い髪と、血まみれた首と、紅い袴だけであつた。

深夜暗黒の街路に投げ出された女房は恐怖にふるえてゐるうちに路傍を流れる大官川（大官大路を流れていた川、現在は無い）に転落してしまつた。水の張つた冷たい川水、ようやく遠い上がったものの寒風は濡れた身体から容赦なく体温を奪つていく。人家の門を

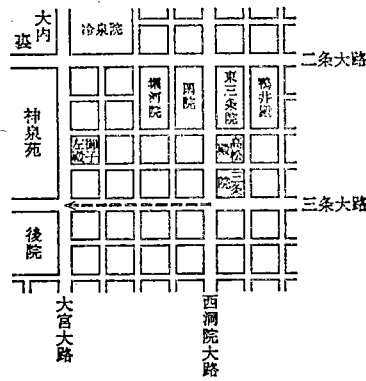
たいたければ、深夜の訪問者に門を開けてくれる人はいない。彼女を待つていたのは煉死と、その死体に群がる野犬たちだつた。翌朝人々が見たのは水の中に散らばつてゐる長い長い髪と、血まみれた首と、紅い袴だけであつた。

深夜暗黒の街路に投げ出された女房は恐怖にふるえてゐるうちに路傍を流れる大官川（大官大路を流れていた川、現在は無い）に転落してしまつた。水の張つた冷たい川水、ようやく遠い上がったものの寒風は濡れた身体から容赦なく体温を奪つていく。人家の門を

たいたければ、深夜の訪問者に門を開けてくれる人はいない。彼女を待つていたのは煉死と、その死体に群がる野犬たちだつた。翌朝人々が見たのは水の中に散らばつてゐる長い長い髪と、血まみれた首と、紅い袴だけであつた。

深夜暗黒の街路に投げ出された女房は恐怖にふるえてゐるうちに路傍を流れる大官川（大官大路を流れていた川、現在は無い）に転落してしまつた。水の張つた冷たい川水、ようやく遠い上がったものの寒風は濡れた身体から容赦なく体温を奪つていく。人家の門を

たいたければ、深夜の訪問者に門を開けてくれる人はいない。彼女を待つていたのは煉死と、その死体に群がる野犬たちだつた。翌朝人々が見たのは水の中に散らばつてゐる長い長い髪と、血まみれた首と、紅い袴だけであつた。



犯人の逃走経路 (←印)



入質にし大官大路の辻に捨てて逃げました。後で聞けば煉死して大に食われなかつたか」と白状したというのである。

世間では時通はこの功によつて五位に叙せられ「大夫ノ尉」に昇進するにちがいないとの評判もつぱらだったが、なぜかその賞は行なわれなかつた。「必ず恩賞を与える」との宣言があつたのに、どういふ事情があつたのだろうか。

が、ついに時通は五位に叙せられ、左衛門大夫となつた。世間の人がこそつて非難したからであらう。思うに、たとえ女があつてもやはり寢堂などは十分に用心しておくべきである。「油断して寝ていたから人質にも取られたのだ」と人びとは言い合つたのであつた。

下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話

メディア状況は大いに異なるが、わが『今昔物語集』の撰者は、時代を鋭く捉え、歴史を見据えながら、物語の中に、ひとこと教訓めいた言葉を差し挟まないといられなかったのかもしれない。

〔注〕

- (1) 『新潮日本古典集成——今昔物語集 本朝世俗部四』(校注者 阪倉篤義・本田義憲・川端善明) 新潮社、一九八四年。引用にあたって、校注者の振り仮名をかなり省略し、必要最小限にとどめた。
- (2) 池上洵一『「今昔物語集」の世界』筑摩書房、一九八三年、四五―四六頁。
- (3) この記事ふうのものに付した事件関連地図は、池上洵一の前掲書(四七頁)から拝借し、また「顔写真」まがいのものは、松村雄二(監修)・甲斐謙二(画)『マンガ今昔物語集』河出書房新社、一九九〇年、から適当な絵を切り取り、利用した。
- (4) 小林美和『語りの中世文芸』和泉書院、一九九四年。
- (5) 荒木博之『日本語から日本人を考える』朝日新聞社、一九八〇年、第二部(九〇―一四八頁)。
これに対して、『ことわざ』は、非原理的・一回性的な世界とかかわるが、その表現においては、逆に、普遍的な知識の形をとる、と荒木は述べている。

下野守為元の家に入りし強盗、女を取る話

- (6) 池上洵一、前掲書、三五頁。
- (7) 池上洵一、前掲書、四四頁。
- (8) ジェラルド・ジュネット(花輪光・和泉涼一訳)『物語のディスクール——方法の試み』水声社、一九八五年、一五頁。
- (9) 鳥井守幸「新聞雑学ノート②——愉しき悪魔の誘惑・新聞記者心携『校切型辞典』「事件きりぬぎ帖」一一八号、毎日新聞社、一九七九年。
- (10) たとえば、朝日新聞が一九九三年九月二五日夕刊で、紙面の衣替えキャッチ・フレーズに「面白くてためになる／ページをめざします」と面白い記事で宣伝をしていたが、この種の言葉は、近時の新聞に一般的にみられる。
- (11) 池上洵一、前掲書、五八頁。
- (12) 北村日出夫「出来事・物語・ジャーナリズム」『評論・社会科学』第四十八号、同志社大学人文学会、一九九四年、一二頁。
- (13) ロールシャッハ・テスト Rorschach Test は、スイスの精神科医ヘルマン・ロールシャッハが創案したインクプロジェクトを利用した人格診断である。
- (14) 池上洵一、前掲書、五九頁。
- (15) 池上洵一は『今昔』は説話集である。説話は伝承されたものであり、説話集の撰者が勝手に創作したものではない。だからこそわたしも『作者』とはいわず『撰者』と称する。」といっている(池上洵一、前掲書、二二五頁)。

下野守為元の家に入りし強盜、女を取る話

(16) 池上洵一、前掲書、五七、五八頁。

(17) 池上洵一、前掲書、四八頁。

(18) 『新潮日本古典集成——今昔物語集 本朝世俗部四』(新潮社、一九八四年)でも、校注者(阪倉篤義・本田義憲・川端善明)は、当該説話の「吉き女房」の語句の「注記」で次のように述べている。

史実としては、花山院女王。退位後の花山院とその乳母子(めのとこ)中務との間に生まれ、父花山院の愛薄く、中務の叔母、兵部命婦に養われた(『榮花物語』)。内親王宣下を受けず(それを女王という)、この事件の当時は、皇女とはいえ「御乳母子の腹にて」、上東門院彰子(道長女、当時皇太后)に女房として出仕していた。『今昔』地の文が、この女性に時に敬語「御す・給ふ」を用い、「姫君」とも表現しているのは、花山院女王と知っていて伝えた『今昔』の典拠の表現が、その投影であらうと解されている。

(19) 池上洵一、前掲書、六六頁。